

可換環の局所化

2025 年 8 月 11 日

ここで環とは零環でない単位的可換環とする.

Def 0.1

A を環とする. $S \subset A$ が次の条件 (1)(2) を充たすとき, 積閉集合という.

- (1) $1 \in S, 0 \notin S$
- (2) $a, b \in S \Rightarrow ab \in S$

Prop 0.1

A を環, S を A の積閉集合とする. $A \times S$ 上の関係 \sim を

$$(a_1, s_1) \sim (a_2, s_2) \iff \exists s \in S, s(a_1s_2 - a_2s_1) = 0$$

で定めるとこれは同値関係となる.

Proof. $1 \in S$ に対し, $1(as - as) = 0$ より $(a, s) \sim (a, s)$

$(a_1, s_1) \sim (a_2, s_2)$ ならば $(a_2, s_2) \sim (a_1, s_1)$ は明らか.

$(a_1, s_1) \sim (a_2, s_2), (a_2, s_2) \sim (a_3, s_3)$ とすると,

$$\exists s, s' \in S, s(a_1s_2 - a_2s_1) = s'(a_2s_3 - a_3s_2) = 0$$

このとき,

$$ss's_2(a_1s_3 - a_3s_1) = s's_3s(a_1s_2 - a_2s_1) + ss_1s'(a_2s_3 - a_3s_2) = 0$$

であり, S は積閉集合なので $ss's_2 \in S$ であるから, $(a_1, s_1) \sim (a_3, s_3)$ ■

Remark 0.1. $\exists s \in S$ の条件が無いと (つまり $a_1s_2 - a_2s_1 = 0$ のみだと), 推移律が一般には成立しないため同値関係とならない.

Def 0.2

A を環, S を A の積閉集合とする. $A \times S$ の Prop 0.1 の同値関係による商 $(A \times S)/\sim$ を $S^{-1}A$ とかき, 同値類 $[(a, s)]$ を $a/s, \frac{a}{s}, s^{-1}a$ 等とかく. $a_1/s_1, a_2/s_2 \in S^{-1}A$ に對し,

$$\frac{a_1}{s_1} + \frac{a_2}{s_2} := \frac{a_1s_2 + a_2s_1}{s_1s_2}, \quad \frac{a_1}{s_1} \frac{a_2}{s_2} := \frac{a_1a_2}{s_1s_2}$$

と定義するとこれは well-defined となる. この和と積によって $S^{-1}A$ は単位的環となる. この環 $S^{-1}A$ を A の S による局所化という.

Remark 0.2. $0/1$ は加法単位元, $1/1$ は乗法単位元となるが, $0/1 = 1/1$ と仮定すると,

$$\exists s \in S, s(1 - 0) = s = 0$$

であるが, これは積閉集合の定義に反するので $S^{-1}A$ は零環ではない.

Proof. (和と積の well-defind 性)

$(a_1, s_1) \sim (a'_1, s'_1), (a_2, s_2) \sim (a'_2, s'_2)$ とする. このとき,

$$\exists s, s' \in S, s(a_1s'_1 - a_1s_1) = s'(a_2s'_2 - a'_2s_2) = 0$$

$ss' \in S$ であり,

$$\begin{aligned} ss'((a_1s_2 + a_2s_1)s'_1s'_2 - (a'_1s'_2 + a'_2s'_1)s_1s_2) \\ = s's_2s'_2s(a_1s'_1 - a'_1s_1) - ss_1s'_1s'(a_2s'_2 - a'_2s_2) = 0 \\ \therefore (a_1s_2 + a_2s_1, s_1s_2) \sim (a'_1s'_2 + a'_2s'_1, s'_1s'_2) \quad \therefore \frac{a_1s_2 + a_2s_1}{s_1s_2} = \frac{a'_1s'_2 + a'_2s'_1}{s'_1s'_2} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} ss'(a_1a_2s'_1s'_2 - a'_1a'_2s_1s_2) &= ss'(a_1a_2s'_1s'_2 - a'_1a_2s'_1s_2 + a'_1a_2s'_1s_2 - a'_1a'_2s_1s_2) \\ &= ss'(a_2s'_2(a_1s'_1 - a_1s_1) + a'_1s_1(a_2s'_2 - a'_2s_2)) \\ &= s'a_2s'_2s(a_1s'_1 - a_1s_1) + sa'_1s_1s'(a_2s'_2 - a'_2s_2) = 0 \\ \therefore (a_1a_2, s_1s_2) \sim (a'_1a'_2, s'_1s'_2) \quad \therefore \frac{a_1a_2}{s_1s_2} &= \frac{a'_1a'_2}{s'_1s'_2} \end{aligned}$$

■

Def 0.3

A を環, S を A の積閉集合とする. 準同型 $\iota : A \hookrightarrow S^{-1}A, a \mapsto a/1$ を局所化に付随する準同型という. この準同型により $A \subset S^{-1}A$ と考えることがある. 以降 $0/1, 1/1$ を $0, 1$ とかくことにする.

Remark 0.3. $s \in S$ であれば $(s/1)(1/s) = 1 \in S^{-1}A$ なので, $S \subset S^{-1}A$ である (正確には $\iota(S) \subset S^{-1}A$). $S^{-1}A$ はこの条件を充たす普遍的な環である.

Prop 0.2 (局所化の普遍性)

A, B を環, $S \subset A$ を積閉集合, $\iota : A \hookrightarrow S^{-1}A$ を局所化に付随する準同型, $\varphi : A \rightarrow B$ を準同型とする. $\varphi(S) \subset B^\times$ であれば, 準同型 $\psi : S^{-1}A \rightarrow B$ で,

$$\psi \circ \iota = \varphi \quad (\text{i.e. } \forall a \in A, \psi(a/1) = \varphi(a))$$

なるものが unique に存在する.

Remark 0.4. $\psi \circ \iota = \varphi$ とは次の図式を可換にするということである.

$$\begin{array}{ccc}
 S^{-1}A & \xrightarrow{\exists! \psi} & B \\
 \uparrow \iota & \circlearrowleft & \searrow \varphi \\
 A & &
 \end{array}$$

Proof. $\psi : S^{-1}A \rightarrow B$ を $\psi(a/s) := \varphi(a)\varphi(s)^{-1}$ と定義するとこれは well-defind.

$\because a_1/s_1 = a_2/s_2 \in S^{-1}A$ とするとき, $\exists s \in S, s(a_1s_2 - a_2s_1) = 0$ である. このとき, $\varphi(s)(\varphi(a_1)\varphi(s_2) - \varphi(a_2)\varphi(s_1)) = 0$ であるが, $\varphi(s) \in B^\times$ より $\varphi(a_1)\varphi(s_2) - \varphi(a_2)\varphi(s_1) = 0$ $\varphi(s_1)^{-1}\varphi(s_2)^{-1}$ をかけて, $\varphi(a_1)\varphi(s_1)^{-1} = \varphi(a_2)\varphi(s_2)^{-1} = 0$

ψ は環準同型になる. $\forall a \in A, \psi(a/1) = \varphi(a)$ より $\psi \circ \iota = \varphi$ を充たす.

また ψ が条件を充たす準同型であれば, $\varphi(a) = \psi(a/1) = \psi(a/s)\psi(s/1) = \psi(a/s)\varphi(s)$ より, $\psi(a/s) = \varphi(a)\varphi(s)^{-1}$ となる. よって ψ は unique. ■

Def 0.4 (f による局所化)

A を環, $f \in A$ を非零因子とする. $f^n (n \in \mathbb{Z}_{\geq 0})$ は非零因子であるから $S := \{f^n \mid n \in \mathbb{Z}_{\geq 0}\}$ は積閉集合となる. このときの $S^{-1}A$ を A の f による局所化といい, A_f または $A[1/f]$ で表す.

Example 0.1. $\mathbb{Z}[1/3] = \{n/3^m \mid n \in \mathbb{Z}, m \in \mathbb{Z}_{\geq 0}\}$

Def 0.5

A を環, $\mathfrak{p} \in \text{Spec}(A)$ とする. $1 \notin \mathfrak{p}, 0 \in \mathfrak{p}$ より $S := A \setminus \mathfrak{p}$ とおくと, $1 \in S, 0 \notin S$ であり素イデアルの定義から S は積に関して閉じているので, S は積閉集合となる. このときの $S^{-1}A$ を A の \mathfrak{p} による局所化といい, $A_{\mathfrak{p}}$ で表す.

Example 0.2. $\mathbb{Z}_{(3)} = \{n/m \mid n \in \mathbb{Z}, m \in \mathbb{Z} \setminus (3)\}$

Def 0.6

A を環とする. $S = \{s \in A \mid s : \text{零因子}\}$ とするとこれは積閉集合で, $S^{-1}A$ を A の全商環といいう. A が整域であれば零因子全体は $S = A \setminus \{0\}$ である. $a, b \in A \setminus \{0\}$ なら $(a/b)(b/a) = 1$ となるので, A の全商環は体である. これをの商体といい, $\text{Frac}(A)$ とかく.

Remark 0.5. 整域 A の商体は素イデアル (0) による局所化 $A_{(0)}$ である.

Example 0.3. (1) 有理数体 \mathbb{Q} を \mathbb{Z} の商体と定義する.

(2) 体 K 上の多項式環 $K[x_1, \dots, x_n]$ の商体を有理関数体といい $K(x_1, \dots, x_n)$ でかく.

Def 0.7

A を環とする。 A の極大イデアルが \mathfrak{m} のみであるとき、 (A, \mathfrak{m}) を局所環という。 $(A, \mathfrak{m}), (B, \mathfrak{n})$ が局所環で、 $\varphi : A \rightarrow B$ が $\varphi(\mathfrak{m}) \subset \mathfrak{n}$ なる準同型であるとき、 φ は局所的な準同型であるいう。

Prop 0.3

A を環、 $\mathfrak{m} \subsetneq A$ をイデアルとする。このとき以下は同値。

- (1) (A, \mathfrak{m}) は局所環
- (2) $A \setminus \mathfrak{m} \subset A^\times$

Proof. (1) \Rightarrow (2) $a \in A \setminus A^\times$ すると a を含む A の極大イデアルが存在する。(1) からそれは \mathfrak{m} に一致するので $a \in \mathfrak{m}$ 。したがって $A \setminus A^\times \subset \mathfrak{m}$ 、つまり $A \setminus \mathfrak{m} \subset A^\times$
(2) \Rightarrow (1) $\mathfrak{m} \subsetneq I$ がイデアルであるなら、 $a \in I \setminus \mathfrak{m}$ が取れる。このとき $a \in A \setminus \mathfrak{m} \subset A^\times$ なので $I = A$ となる。よって \mathfrak{m} は極大イデアル。また \mathfrak{n} が \mathfrak{m} と異なる極大イデアルであれば、 $a \in \mathfrak{n} \setminus \mathfrak{m}$ が取れるが(2)より $a \in A^\times$ 。よって $\mathfrak{n} = A$ となり矛盾。よって (A, \mathfrak{m}) は局所環。 ■

Prop 0.4

A を整域、 $\mathfrak{p} \in \text{Spec}(A)$ とする。

- (1) $A_{\mathfrak{p}}$ は $\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ を極大イデアルとする局所環である。
- (2) $\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}} \cap A = \mathfrak{p}$
- (3) 準同型 $\bar{\iota} : A/\mathfrak{p} \rightarrow A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ は同型 $\text{Frac}(A/\mathfrak{p}) \simeq A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ を誘導する。
特に、 \mathfrak{p} が極大イデアルなら $A/\mathfrak{p} \simeq A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$
- (4) \mathfrak{p} が極大イデアルなら、 $\forall n \in \mathbb{Z}_{>0}, \mathfrak{p}^n A_{\mathfrak{p}} \cap A = \mathfrak{p}^n$

Remark 0.6. A が環 B の部分環で $I \subset A$ がイデアルであるとき、 I で生成された B のイデアルを IB とかく。 $\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ は \mathfrak{p} で生成された $A_{\mathfrak{p}}$ のイデアル。

Remark 0.7. 局所化に付随する準同型 $\iota : A \hookrightarrow A_{\mathfrak{p}}$ によって $A \subset A_{\mathfrak{p}}$ と考えている。

Remark 0.8. (3) の $\bar{\iota}$ について。 $\pi_1 : A \rightarrow A/\mathfrak{p}, \pi_2 : A_{\mathfrak{p}} \rightarrow A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ を自然な射影とする。 $f := \pi_2 \circ \iota : A \rightarrow A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ と定義すると、 f は準同型である。 $a \in \mathfrak{p}$ とすると $\iota(a) \in \mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ より $f(a) = (\pi_2 \circ \iota)(a) = 0$ である。よって $a \in \text{Ker } f$ であり $\mathfrak{p} \subset \text{Ker } f$ が従う。準同型定理により、準同型 $\bar{\iota} : A/\mathfrak{p} \rightarrow A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ が存在して、 $f = \bar{\iota} \circ \pi_1$ となる。

$$\begin{array}{ccc}
 A_{\mathfrak{p}} & \xrightarrow{\pi_2} & A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}} \\
 \uparrow \iota & \nearrow f & \uparrow \exists \bar{\iota} \\
 A & \xrightarrow{\pi_1} & A/\mathfrak{p}
 \end{array}$$

Example 0.4. $(3) \in \text{Spec}(\mathbb{Z})$ は極大イデアルである.

- (1) $\mathbb{Z}_{(3)}$ は $(3)\mathbb{Z}_{(3)} = \{n/m \mid n \in (3), m \in \mathbb{Z} \setminus (3)\}$ を極大イデアルとする局所環
- (2) $(3)\mathbb{Z}_{(3)} \cap \mathbb{Z} = (3)$
- (3) $\mathbb{Z}/(3) \simeq \mathbb{Z}_{(3)}/(3)\mathbb{Z}_{(3)}$
- (4) $(3^n)\mathbb{Z}_{(3)} \cap \mathbb{Z} = \{n/m \mid n \in (3^n), m \in \mathbb{Z} \setminus (3)\} \cap \mathbb{Z} = (3^n)$

Proof. (1) $S := A \setminus \mathfrak{p}$ とおく. $a/s \in A_{\mathfrak{p}} \setminus \mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ ($a \in A, s \in S$) とすると, $a \notin \mathfrak{p}$. よって $a \in S$ なので $a/s \in (A_{\mathfrak{p}})^{\times}$. したがって **Prop 0.3** により, $A_{\mathfrak{p}}$ は $\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ を極大イデアルとする局所環.

- (2) $\mathfrak{p} \subset \mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ と $\mathfrak{p} \subset A$ から $\mathfrak{p} \subset \mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}} \cap A$ である. $a \in \mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}} \cap A$ とすると, $\exists b \in \mathfrak{p}, \exists s \in A \setminus \mathfrak{p}, a = b/s$. このとき $a, s \in A$ かつ $sa = b \in \mathfrak{p}$ であるが $s \notin \mathfrak{p}$ と \mathfrak{p} が素イデアルであることから $a \in \mathfrak{p}$. よって $\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}} \cap A \subset \mathfrak{p}$
- (3) *Remrk 0.8* から $\iota : A \rightarrow A_{\mathfrak{p}}$ は準同型 $\bar{\iota} : A/\mathfrak{p} \rightarrow A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ を誘導する. $\bar{S} := (A/\mathfrak{p}) \setminus \{0\}$ の元は S の元で代表されていて, その $\bar{\iota}$ での行先は $A_{\mathfrak{p}}$ での単元なので $A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ でも単元である. よって $\bar{\iota}(A_{\mathfrak{p}}) \subset (A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}})^{\times}$ である. したがって **Prop 0.2** を適用すると, 準同型 $\psi : \text{Frac}(A/\mathfrak{p}) = \bar{S}^{-1}(A/\mathfrak{p}) \rightarrow A_{\mathfrak{p}}/\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}$ が誘導される. $\text{Frac}(A/\mathfrak{p})$ は体なので ψ は单射. $a \in A, s \in S$ なら $\psi((a + \mathfrak{p})(s + \mathfrak{p})^{-1}) = a/s \pmod{\mathfrak{p}A_{\mathfrak{p}}}$ なので ψ は全射. よって ψ は同型.
- (4) $\mathfrak{p}^n \subset \mathfrak{p}^n A_{\mathfrak{p}}$ と $\mathfrak{p}^n \subset A$ から $\mathfrak{p}^n \subset \mathfrak{p}^n A_{\mathfrak{p}}$ である. $a \in \mathfrak{p}^n, s \notin \mathfrak{p}$ で $b := a/s \in A$ とする. \mathfrak{p} の極大性と $s \notin \mathfrak{p}$ から $\mathfrak{p} + (s) = A$ である. よって $\exists c \in \mathfrak{p}, \exists d \in A, c + ds = 1$ である. このとき, $\exists e \in A, 1 = (c + ds)^n = c^n + es$ であり, $bs = a$ なので, $b = bc^n + bes = bc^n + ae \in \mathfrak{p}^n$. したがって $\mathfrak{p}^n \supset \mathfrak{p}^n A_{\mathfrak{p}}$

■

参考文献

- [1] 雪江明彦, 『整数論 1 初等整数論から p 進数へ』, 日本評論社, 2013